

あ。

と、思った。

毎朝通学に使う電車で。

最初は、この制服は見かけた事がないな、と思っただけだったが、毎朝一緒に乗り合わせるようになって、次第に他の情報も入り始め、その学校は自分が降りる駅からさらに二つ先に進んだ所にある進学校だ、とか、私立の学校で校風は割りと自由らしい、とか。

聞けば地元ではそれなりに名の通った伝統校らしい、とか。

その制服のネクタイの色は、自分と同じ学年のものだ、とか。

——彼の名前は、伊達政宗、と言うらしい、とか。

地元の、至って普通の、可もなく不可もない高校に通っている真田幸村は、毎朝部活の朝練に出るために、通常の学生や社会人などより幾分早い時間帯の電車に乗るのが習慣だった。

小さい頃からやんちゃで落ち着きがなく、走り回っては有り余る体力を発散させて自宅の庭先を荒らし、公園を端から端まで探検し、終いには近くの小高い山にまで登って怪我をして帰ってきて、家人を慌てふためかせたりして過ごしてきた幼少時代から、高校生になった今になるまで、体を動かす事だけは好きで、得意な幸村が、好きが高じて陸上部に所属したのは自然の摂理に適ったものだった。

中学時代から続けた陸上のお陰で、今の高校にはすんなりと入れたし、それなりに陸上界では優秀な成績を収めているので、少しくらいテストの結果が悪くても、特に文句も言われず、敬愛すべき素晴らしい指導者に巡り合えた上に、世話好きな年嵩の従兄弟も同じ学校にいたりして、なかなか自分なりに順風満帆な高校生活を送っていると、思っていた。

そんな幸村が朝練のために早朝の電車に乗り始めて、既に彼是一年が過ぎようとしていた。学年が上がり、相変わらず続く厳しい練習に通うのも、朝早くに起きるのも、すっかり慣れて、いつもと同じ時間にいつもと同じ電車のいつもと同じ車両に乗り込んだ時だったのだ。

あ、と思ったのは。

早朝なので電車はほぼ空席ばかりで、幸村は束の間の憩いの時間をいつも座席に座って確保できていた。

いつもと同じ車両の、出入り口付近の一席が、幸村の指定席になっていた。そして、今日もいつも通りにその席に腰掛けようとして、目をやったその時に気付いたのだ。

いつもの座席に、人が座っている、と。

今までも、なくはなかったが、殆どなかった出来事に幸村は一瞬戸惑いを覚えたが、まあ、こんな日もあるさ、と特に気にも留めずに、自分が勝手に指定席扱いしていたのだしな、と思いつつも幸村が座っている人の隣に腰掛けた。

いつも幸村が座っている席の、前の席はやはり、早朝から仕事があるのか、いつも同じ社会人が座っていて、今朝もその社会人は既に腰掛け、ヘッドフォンをして夢の中に旅立っていたし、その横も雑誌に目を通すスーツ姿の人がいたりして、学生で運動部特有の馬鹿みたいに大きい鞆を抱えた自分が座るには憚られたし、何より自分が指定席としていた場所の隣は空いていたのだ。

いくら元気が取り柄の幸村と言えど、厳しい部活の前のひと時ぐらいは重たい鞆を肩から下ろし座りたい、と言うのが人情と言うもので。

自分がいつも座っている席に座っているのは、見た事のない学校の制服と思しきもので、その人の隣に二人分程空いて、社会人らしき女性が一生懸命鏡を覗き込んでいたので、幸村は、その見た事のない制服姿の人の隣に、自分の鞆を抱えて座った。

見た事のない制服姿の人は、艶々とした黒髪を揺らして、自分と同じように通学鞆を抱え込

んで俯いていたので、寝ているようだった。

この制服は、あまり見かけた事がないな、と思いつつも、いつもと違うシチュエーションに戸惑い、何となく隣の人を見てしまう。

電車ががたん、と揺れるたびに同じタイミングで隣の人の頭も揺れて、その瞬間に、ふわり、と良い匂いがして、幸村は驚いて一人分空けて座っていた鏡を一生懸命覗き込んでいた女性を見遣ったが、人工的な派手な香りは漂ってくるが、さっきの匂いは彼女からではないな、と思いついて、再び見るともなしに見る場所もないので、対面にある社会人たちの頭越しに流れる景色を見ていた。

そして、再び電車ががたん、と揺れ隣の人の頭もぐらりと揺れて、ふわりと匂う。

これは、と思つて隣に目をやれば、揺れる黒髪から同じ男、しかも多分自分と同じくらいの高校生と思われる人から、香るのだ。

自分などせいぜい湯上りに石鹸の匂いがする程度で、それ以外は常に部活部活で、自宅に帰れば同居している年嵩の従兄弟に、汗臭いから早く風呂に入れ、と追い立てられる程なのに。同じ高校生男子とは思えないようなその風情に、幸村は、こんな人も世の中にはいるのだな、と妙な関心を覚えた。

がたん、がたん、と電車が揺れるたびに、同じリズムでその黒髪は揺れて、その度にふわり、ふわり、と良い匂いがして、幸村は慣れない状況に頬が熱くなるような気がしていた。

同じ男なのに、と思えど、普段そんな風に人の匂いを、髪のを感じた事も意識した事もないので、何やらどきどきしてしまつて、落ち着かなかつたので、ぎゅ、と鞆を抱え直して歯

を食い縛って再び対面の社会人たちの頭越しに車窓の景色に目をやれば、こっん、と肩に何か触れる気配がして、再び、あ、と思う。

彼の、頭が、俺の肩に乗っている、と。

そう意識してしまうと、肩の辺りが今度は気になって、だからと言って避ける気にもなれずに、彼の頭が乗っている右肩がじんわり温かいのが、思いのほか心地よかったりなどしてしまい、俺はどうしたんだ、と思っているうちに次の駅に到着して、人がぞろぞろと乗り込んできて、自分の横の一人分空いていた席も埋まったので、何となく癖でやってしまう隣の人から離れる、と言う事を無意識でやってしまったので、逆に彼の頭が乗っている肩が余計に彼に近づいてしまい、起こしてしまったか、と要らぬ心配までしてしまって、幸村は自分の頭を掻き毟りたいような気分になった。

運良く寝ている彼は気付かずにそのまま寝ていてくれたので、幸村は何で俺が、と思うものの内心でほっと溜息など吐いてしまって、別にこの人が起きたって俺には関係ない事なのに、と想ったりもするのだが、何となくこの肩の重みを逃したくないのも本心で。

この人はこんな風に静かに寝る人なんだな、と自分の肩にかかる黒髪と、目を落とせば視界に入る渦の弱い旋毛に、思わず頬が緩んでしまい、俺はおかしいのか、と慌てて目を逸らしたりしているうちに、自分が降りる駅に着いてしまいそうになって、漸く、あの、と一言声をかけてみた。

「あの、すみません、俺、ここで降りるんで」

寝ている人に悪いかな、とも思ったが小声で声をかければ、彼は、かくん、と頭を揺らした

あとに、え、と言うような顔をして幸村を見つめた。

「あ、Sorry。」

小さく謝罪の意味の英語が聞こえて、え、この人まさか外国の人なのか、と一瞬驚くものの、すぐあとに、すみません、とさらに小さな声がして、あ、日本人だった、よかった、と幸村が思い直していると、恥ずかしそうに頬を赤らめた彼が耳に差し込んでいたイヤフォンを外し、シヤカシヤカ、と音が漏れて、ああ、これのお陰で何も気付かなかったのか、と幸村は思い、いえいえ、と社交辞令を述べて席を立った。

「あの、頭、その、……」

言いくさそうに言葉を濁した彼に、ああ、この人は恥ずかしがりなのだな、未だに頬も赤いし、と思つて、幸村は大丈夫ですよ、と声をかけるとそれじゃあ、と言つて開いた自動ドアを潜つたのだった――。

内心の動揺をひた隠して。

彼の、あの美しさと言つたら……。

顔を上げた途端に目を惹きつけられたあの黒髪と対のような目。

切れ長の二重に細長い瞳が鋭くも、きれいで。

片側は長めの前髪で隠れていたが、あの美しい目の淵が薄赤く染まった顔が可愛らしかったな、と幸村は部屋で着替えながら思い起こしていた。

あんなに色が白い人も、滅多にいないだろうな、とも。

しかし、俺の、自分ではおかしいと思わないが、従兄弟や友達に言わせると、おかしな喋り

方、とやらが、出なくてよかった、とも思っていた。

幸村はいつの頃からか癖のように対他人や、敬うべき相手になると、自分の事を某、語尾などがござる口調になってしまっていて、それは幼い時からで、実は今までも散々矯正しようとしてきたが、結局三つ子の魂何とやらで、今に至るまで抜けきらずにいるのだ。

従兄弟や近しい友達などは、おかしいと言いなながらも、最早手遅れと言った体で普通に接してくれているが、初対面の相手などからは未だに驚かれたりやや引き攣られたりもしていた。

だから、今朝は、声をかけるのに勇気がいったし、口数も極力無駄が出ないように精一杯意識したのだ。

声も普段から大きい大きい、とにかく煩い、と言われ続けているが、それも抑えたり、おかしな印象を持たれないようには、したのだ。

彼に、変な風に思われなくなかった……？

そこまで考えて着替え終わった制服をロッカーに投げ入れると、ぶるぶると濡れた犬のように頭を振って、自分の頬を軽く二度程叩くと、気合気合、と部室の窓が割れんばかりの大声で自分に活を入れた。

勿論、他の部員たちに迷惑がられたのと言うまでもなく、部室のいろいろな場所から、真田いい加減にしるよ、と同級生や先輩からの文句や、文句の言えない後輩たちからは、真田先輩ひでえ、と悲鳴が上がっていたのだった。

あの人は、今日、たまたま、あの電車に乗り合わせただけだし、そもそも男ではないか。俺と同じ男だ。

たまたま自分の周りにはいないタイプだったから、珍しかっただけだ。

あんな風に喋る人もいないし、……そう言えば、あの、少し掠れたような声は、寝起きだったからでござろうか、それとも元々の声なのだろうか。あの声も、耳に、残る、……。

「幸村、何をボーっとしておる」

グラウンドで敬愛する師匠に声をかけられて、幸村は再びはっとした。

また、今朝のあの人の事を考えていた。

「申し訳ありません、お館様！」

ひとつ謝ってごつんと、拳をもらうと、幸村は言われたわけでもないのに、グラウンドを走りに行ってしまった。

お館様直々の指導中だったと言うのに、俺としたことが、と生来持っている熱血で、実直な部分が高ぶって、相変わらずの大声で、申し訳ありませんお館様！ と雄叫びを上げてグラウンドを周回するのは、最早陸上部の名物と成り果てていたので、ああ、また陸部の真田か、と言うような扱いで、部員は勿論、陸上部以外のグラウンドを共有している他の運動部員達やら、果ては関係のない一般の生徒や先生たちにまで、浸透していた。

陸上部員ですら嫌な顔をするほどにグラウンドを走り回ってきた幸村は、さすがにせえせえと息を切らしていたものの、一時でも今朝の事を忘れられた事に、満足していた。

翌日、再びいつもの電車で彼に会うまでは――。



再び、あ、と思う。  
今朝も、いた、と。

乗り込んで周りを見れば、いつもの社会人がやはり夢の中で、その横には昨日と同じスーツ姿の人が今日の新聞を広げていて、鏡を覗き込んでいた女性は今日は携帯を弄っていた。

そうして、幸村は俯き揺れる黒髪の隣に座った。

ふわ、と香る匂いに、ああ、この人の匂いなんだな、と思って、肩に担いだ鞆を膝の上で抱えると、幸村も隣の黒髪に倣うように俯いて目を閉じた。

がたんがたん和電車の揺れに身を任せていると、朝は強くて、いつもすつきりと目覚めるので、特に眠くもなかったが、なるほど、これは案外地よいかもしれないな、と思って電車で寝てしまう人の気持ち少し分かって、幸村はひっそりと笑った。

ちら、と気になって右目を開けてみれば、やはり昨日と同じ黒髪がゆらゆらと揺れていて、小さく小さく彼の耳の辺りからシャカシャカと音が漏れていて、この人はどこから乗ってきて、どこで降りるのだろうか、と気になってしまう。

幸村はあまり音楽など聞く趣味もないし、陸上一辺倒でやってきて、しかも学校までの距離も電車に乗って三十分程度なので、こういった通勤通学御用達グズみたいなものは持ち合わせていなかった。

携帯ですら、つい最近漸く手に入れて、未だにメールと電話の機能ぐらしか使っていない有様で。

佐助―例の従兄弟―などは、あいぼつど、とか言うものを一生懸命編集しては、今度はあの新曲をだうんろーどしなきや、とか、幸村には意味不明な言葉をよく並べ立てているが、幸村自身は至って興味がないので、ふうん、と生返事をして終わりなのだ。

だから、これだけ重装備（よく見ると彼は手に文庫本を持っていた）で、通学していると言う事は、随分遠くから乗っているのだろうな、と幸村なりに予測してみた。

そうして、ちらりと見れば、もぞりと隣も動いて、はっとしたように顔を上げて、左右を見回し、窓の外を睨みつけるように見遣ったかと思うと、あからさまにほっとした様子で、そこで、漸く、隣にいた幸村に気付いたようだった。

どうやら彼は乗り過ごしたとも思ったのか、再び昨日と同じようにあの美しい目の淵を薄赤く染めて、あ、と口の形だけで表した。

「おはようございます」

その様子に微笑ましい思いになっていた幸村は、その気持ちのままに、彼に声をかけた。なんて、可愛らしいのか、と。

そう思って、幸村は妙に上向いた気分で、自分でも思ってもいなかったような上機嫌な声が出ってしまった。

「Oh! アンタ、昨日の…Morning」

自分で自分の声に驚いていた幸村だったが、彼も挨拶を返してくれた事に、しまった、と思っていた気持ちが再浮上した。

「まだ、前の駅を出たばかりですよ」

慌てていた彼を安心させようと思つて、寝過ごしてない事を暗に告げれば、再び気恥ずかしそうな顔をして、そうみたいだな、と彼は呟いた。

「Ah、その、昨日は、アンタに迷惑かけちゃったみてエで。その、…Sorry。」

きゅ、ときれいな弓形を象る眉を寄せて、彼は昨日の出来事を再び謝ってきた。

そんな彼を見て、この人はなんと義理堅く誠実な人なのか、と、幸村はさらに彼について知れた事を嬉しく感じていた。

「とんでもござらん。それが、…俺こそ、寝ているところを起こしてしまい申して……」

つかえながらも、気にしないでくれと、伝えたかったのだが、失敗した気がして。

そろり、と彼を見れば、何とも言えない顔で幸村を見ていた。

笑いたいのを堪えてるのがありありと分かつて、今度は幸村が頬染まる思いに駆られた。

眉を寄せて、口元を引き結んでいるのに、笑ったような形になっている彼は、とうとうぶふ、

と吹き出すと、Sorryと言うなり、アンタおかしいよなア、と言つて声を上げて笑い始めた。

かあ、と幸村の頬に熱が集まるが、彼は気にした風もなく、アンタ面白いな、と言つて尖つ

た八重歯を見せて再びきれいな目を細めた。

幸村は、恥ずかしい気持ちになつたものの、彼の笑顔を見れたと言う事の方が断然嬉しくて、

この人の笑つた顔の何ときれいな事か、とそんな事を思つていた。

もつと、笑つた顔が見たいな、とか、この人の声は、元々こういう少し掠れたような声だつ

たんだな、とか。

頬は熱いのに、恥ずかしいのに、少し、彼に近づけたようで、嬉しくて。

笑われているにも拘わらず、幸村も思わず笑ってしまった。

その瞬間びたりと彼の笑い声が止んで、あ、と再び少し驚いたような声が出た。

さっとその頬に朱が走ったように見えただけで、幸村が何だろう、と思つて首を傾げてみれば、なんでもねえよ、と返事が返つてきて、再び俯かれてしまった。

ああ、その顔が見れないのは残念だな、などと幸村は思つたが、昨日の今日でこれだけ話せたのだから、よしとしよう、と自分の欲深さを戒めた。

彼はそのまま手元の文庫本を開いてしまつたし、相変わらず耳の傍からはシャカシャカと音が漏れていて、途切れた会話を復活させるには、少し、勇気がいる状態だったので、幸村は残念に思いながらも、彼の俯いて流れる黒髪から覗く白い耳を見たあとに、自分の降りる駅で降りた。

「それでは、これで」

聞こえるか分からなかつたけれど、一応と思つて声をかければ、See You. と小さく聞こえて、顔は上がつてなかつたけれど、彼から言葉がもらえた事に、足取り軽く幸村は通いなれた道を進んでいった。

あのイヤフォンがなければ、彼の世界はもう少しこちらを見てくれるのだろうか、と道々考へたりもしたが、けれど、俺にはイヤフォンを外してくれと言ふ権利もないしな、と考へて、相変わらず朝練でたるんでいるぞ、と愛の拳をもらう羽目になつたのだつた——。

待ち合わせの時間に、先に現れたのは幸村だった。

ここで間違いないはずだが、と思うのが、頼みの綱の政宗の姿が見えず、若干不安にはなるものの、遠く離れた土地ではないし、それこそ自分が利用する駅からたった二駅なのだ。

間違うはずもない、と少しの事で不安になった自分を叱咤して、幸村は駅舎に取り付けられている時計を見上げた。

まだ十一時まであと五分もあるではないか、と。

きつと政宗殿のことだから、時間丁度に来るはずだ、と彼を思えば自然とそうなる惚れた弱みのような思考でそう決めると、駅前に広がるバスターミナルに目をやった。

今日は晴れてよかったな、などと、暢気な事を思いながら。

幸村がぼんやりと、政宗と落ち合ったあとに、何をして過ごそうか、などと考えていると、たったった、と軽やかな足音が近付いてきて、はあ、と一息入れる気配がした。

「Sorry.」

小さく聞こえて、声のした方を幸村が振り向けば、走って来たらしい政宗が少し息を乱して立っていた。

ほんのりと白皙の頬が赤く染まり、額に張り付く濡れ羽色の長めの前髪を掻き上げながら

Morning. と挨拶する政宗に幸村は目を瞬かせたが、おはようございます、と毎朝の電車で交わすのと変わらない挨拶をしてみせた。

それは、幸村にしてみれば、ああ、政宗殿のこんな様子は普段の電車だけの逢瀬では垣間見れないのだな、と感心してみたり、また、つい、と政宗が掻き上げた前髪のせいで露になった、聡明そうな額や仄赤く染まった頬にどきどきしたりして、普段通りにおはようございます、と返すのが精一杯だったただけなのだが。

「待たせちまったか」

と、政宗がやややし訳なさそうに幸村に尋ねれば、いえいえ、と慌てて首を横に振り、政宗殿こそそんなにお急ぎになられなくとも、と労ってみせたりして、氣遣われた政宗がそれじゃあかっこよくねえ、Coolじゃねえ、と氣恥ずかしさを誤魔化せば、政宗殿は律儀なお方でござったな、と幸村が素で返して、結局政宗がそれに反論できずに、走ったせいで赤かった頬をさらに赤らめる、という遣り取りをして、漸く二人は目的もなく歩き出した。

本当に、コイツは、素でこういう事言うから性質が悪い、と政宗は内心で毒吐くが、それでも、こんな風に手放しで自分を認めてくれて、嘘偽りなく笑顔を向けてくれる幸村に、走ったせいで上がっていた脈拍が、さらに早くなったような気がして、どこへ向かうとも決めずに歩き出した幸村の背中を追いかけた。

当て所なく歩きながら幸村は、ああ、政宗殿のあんな風に恥じらう姿が可愛らしい、と緩む頬を抑えきれずに、笑み零したまま振り返り、政宗殿、今日は何かしたい事はござらんかと訪ねて、何でそんなに笑っていやがる、と政宗に睨まれる羽目になり、慌てて、いや、政宗殿に

こうして会えたのが嬉しくて、と言いつのつもりが、つい本心を漏らしてしまい、さらに政宗の眉をつり上げる結果になったが、それは政宗も同じで、性格上幸村のように朗らかに表現できないだけで、小さく *smile* と零して、アンタよく、そんな事恥ずかしげもなく言えるよなア、と結局揶揄うしかできなくて、小さく唇を噛んだ。

「政宗殿はこの街に住んでおられるのか」

何が楽しいのか、幸村はうきうきと言った様子で、然程大きくもない駅前からの目抜き通りを歩いて、右に左にと顔を巡らせては、あんな所に和菓子屋がとか、あつちには洋菓子屋がございますぞとか、何やら目につくものと言えば、甘いものが所狭しと置かれて売り出されているような店にばかり反応して見せて、アンタ男のくせにそんなに *Sweets* が好きなのか、と政宗に白々とした目を向けられて、はつとしたような顔になると、かかかと頬を染め、面目ござらんと頭を掻いたが、某は小さいときから甘味が好きで、ともそもそと暴露した。

Oh! と感嘆を上げた政宗は、はははと軽く笑うと、見かけ通りだなアと幸村の肩を叩いた。え、それはどういう事でござろうか、と幸村は慌てたが、アンタのその *Baby Face* には似合いたで、と返されてしまい、今度は幸村がうぐぐ、と黙ってしまった。

ややあって、何やら逡巡したような様子の幸村が、政宗殿は甘いものが好きな男などお嫌いでござろうか、と少し斜め上の質問をしてみれば、*Yes* と政宗に何を言ってるんだコイツは、と言いたげな相槌を貰い、休日ていくら小さな街と言えども、目抜き通りの中にあれば、人通りはそれなりにあるもので、そんな道中で顔を赤らめながら、必死に、政宗殿は甘味好きな男はお嫌でござろうか、政宗殿が嫌がられるのなら甘味は我慢し申す、などと言われていては、

いくら地元ではないと言えども、人一倍羞恥心だとか、Prideだとかがある政宗にしてみれば堪ったものではなく。

「No. そんな事はねェよ」

甘味だろうが何だろうが、人の好みに文句は言わないぜ、と持ち前の人に干渉しないと言う性格を発揮して見せて、そんな事よりこんな人目のある場所でアンタおかしな事聞くな、と唇を尖らせた。

政宗のその言葉を聞いて、まるで主人から許しを得た飼い犬のように幸村は、左様でござるか、と一人納得顔で、再びにこにことしたし、政宗殿が良いと仰るならば、今度某と甘味を食べに参りましょうぞ、と政宗にとつて大事な最後の一言は思い切り無視した返事をして、あんなに必死だったのが嘘のように、笑顔で歩き始めた。

そんな幸村を見遣って、やれやれ、と内心で溜息を吐いて、政宗はアイツはきつと悪い頭の病気にかかっているんだ、と行き場のない気持ちは何とか静めたのだった――。

政宗と幸村は揃って、こんな風に、あの早朝の電車以外で、お互いがお互いに会えるとは、話しながら歩けるとは、と信じられない思いでいた。

暫く二人で商店街の軒先を冷やかしながら歩いていると、なア、と政宗から声がかかった。

何でござろうか、と幸村が政宗を見れば、昼飯食いに行かねェか、と政宗が自分の携帯を見ながら告げた。

幸村もジーンズの尻ポケットに突っ込んでいた携帯を取り出してみれば、待ち受け画面に表示されている時刻表示が丁度昼食時を知らせていて、おお、もうこんな時間でござったか、と



眩き、左様でございますな、と政宗に笑顔を向けた。

「政宗殿は何か食べたいものなど、ありますか」

幸村がそう聞けば、政宗は一瞬考えるような素振りを見せたが、ゴねエな、と一言で済ませ、逆にアンタはないのかよ、と幸村に水を向けた。

幸村も暫く考えたが、ううん、と唸って、某も特には、と答える。

二人して特別食べたい物もなく、かといって何も食べないでいるのも、育ち盛りの二人には敵しいもので、なんだよ、アンタ食い意地張ってそうなのになア、と政宗に毒吐かれた幸村は、好き嫌いもないので、何でも食べられますぞ、と呆けた返事をして、政宗に笑われて。

そして、ああ、やっぱり、と思うのだ。

この人の笑った顔のなんと可愛いことか、と。

初めて電話で会話した晩に思った事を再び思う。

俺は、この人の笑顔のためならば何でもしよう、と。

こんな風に可愛らしく笑顔を見せてくれるのなら、何でもしよう、と。

一人そんな風に思っていると、じゃあよ、と幸村から愛しげな視線を送られている事に気がつきもしない政宗が声をかける。

じゃあよ、と声をかけて幸村を見て不審げな顔になった政宗に、何笑っていやがる、と軽く頭を叩かれて、痛うござる、と口では嘯き、案外この人は口調もぶつきらぼうだが、手も早い人なのだな、と新たに知った政宗の側面に再び頬が緩む幸村だった。

まったくよ、アンタ今日何だか笑いすぎじゃねエの、と口を尖らせた政宗に、形ばかりに申し

訳ござらん、と頭を下げて、それでも幸村の頬は緩んでいて。

なあ、政宗殿。

俺のこの気持ちがあなたに伝わればいいのに。

あなたに会うためだけにやってきた、あなたの住むこの街で、あなたと。

あなたと、こうして笑いあえる事の素晴らしさを。

俺が、どれ程喜んでるか。

今日も、明日も、明後日も、あなたとこうして過ごしたい。

あなたのためだけに、俺はあるのだ。

あながいるからこそ、俺はこんなに笑えるのだ。

あなたに笑っていて欲しいから。

はにかむあなたを見られる、その喜びが、俺に笑顔を齎せるのだ。

政宗殿、このままずっと、あなたと笑っていたい。

どれ程あなたに毒づかれようとも、溜息を吐かれて呆れられようとも、俺は、あなたの傍に  
いたいです。

大好きなあなたの、大好きな笑顔を、ずっと傍で見たい。

大好きなあなたの笑顔を、願わくば、俺が作らせる事ができれば、いいのに。

この連休中は、ずっと、笑って過ごしましょうぞ。

今日も、明日も、明後日も。

明後日どころか、この先も、ずっと――。

はあ、と溜息一つ吐いて政宗は、それでも、コイツのこんな風に明るくて和やかな笑顔が、好きなんだよな、と思う。

ちよつと、頭悪いんじゃないのか、と思ひそうな程に朗らかに笑うところが、実は、好きだなんて、言えやしないけど。

けれども、こうして何気ない会話の最中に笑顔を絶やさず、話しかければ必ず政宗の目を見て話を聞いてくれるし、してくれる。

気紛れに、なアとか、アンタとか呼んでみても、笑顔で。

そんな風に政宗を甘やかすとも思えるような態度でいるのは、どうしてなんだろう、と幸村といるたびに感じてしまう、幸せな勘違いを再びしてしまいそうで、政宗は些か寂しくなる。

コイツは、きつと、友達にならば、みんなに、こんな風に優しく朗らかなんだらうな、と、自分の気持ちに蓋をせねば、と思う気持ちがなるべく前に来るように、考えれば辛いような事を、あえて思つてみたりして。

でも、今日は。

今日だけは。

この笑顔も、この優しさも、幸村自身も。

全部、自分のものなのだ。

三日間できる限り遊ぼうと約束はしているものの、人の予定など、あつてないようなものだ。そんな不確かなものの中で、それでも、今日だけは。

今日だけは、幸村は政宗のものなのだ。

彼が普段使う事もなく、用もない、この街にいるのは、偏に政宗に会うためだけに、訪れたからだ。

たった二駅。

されど二駅。

その距離が、二人を隔てていたけれども。

それでも今、こうして一緒に笑いあえるのだ。

政宗が大好きな、心惹かれる満面の笑顔を乗せた幸村と。

なア、真田。

アンタのその顔が、その笑顔が、俺の心をどれ程揺さぶるか知っているか。

その大きくて吸い込まれそうな目に見つめられると、俺の心臓が抉られたようになるんだ。

アンタのその笑顔で、その大きな目で、馬鹿みたいにでかい声で、笑いかけられるたびに、

見つめられるたびに、名前を呼ばれるたびに、

俺の心臓は壊れたみたいに *boom* を刻むんだ。

なア、それでも、こんなに胸は痛くて、鳩尾の辺りはぎゅつとなつて、苦しくて。それでも。

アンタとこうして笑いあえる喜びは、何にも代え難くて。

知ってるか。

こんなに嬉しいと思っている事。

こうして一緒に他愛もない会話をしながら時々馬鹿みたいに笑いあって、アンタの斜め上の

言葉に呆れる事すらも、俺にとつては。

俺にとっては。

こんなに幸せで、嬉しいと思う事なんて、今までなかったんだぜ。  
全部、全部、アンタによって知らされたんだ。

こんな風に人を思つて辛くなつたり悲しくなつたり嬉しくなつたりする事を。  
アンタがその笑顔で俺に教えてくれたんだ。  
だから。

せめて、今日だけでも。

こんな不気味な見た目の俺だ。

愛想もないし、口も態度も悪い。

だから、贅沢は言わねえよ。

けれど、せめて。

今日だけは。

アンタと一緒にいられる喜びを、俺に。

なァ、いいだろ。

アンタと、今日だけは、一緒にいさせてくれよ。

今日だけは、アンタの笑顔もアンタ自身も、俺の傍に、いてくれよ。

願わくば、アンタの隣にずっと、いられば、いいのにな——。

がちやりと、政宗を抱えた幸村がドアノブを回す音がやけに響いたような気がして、はあ、と深く色付く溜め息を零しながらも、政宗は上げられぬ顔を更に深く俯かせた。

これからこの昂った気持ちのままに幸村と自分が行おうとする事への不安だとか恥ずかしさだとか、こんな風に甘く蕩けそうな雰囲気に居た堪れないような、何とも言い難いこの空間に、染まった頬が更に火照るような気持ちになってしまう。

ドアノブの無機質な音が更にそれを増長させているようで、政宗は無意識の内に形良い唇を噛み締めていた。

ドアを開けてしまえば然程の距離もなくベッドに辿り着くまでに、この部屋が政宗殿の部屋ですか、と感嘆したような幸村の呟きとお邪魔しますと言う、この場の雰囲気にはそぐわないような、けれども幸村らしい律儀な一言があつて、政宗は噛んだ唇が僅かばかり綻ぶのを感じた。ふ、と柔らかく吐息が漏れて思わずと言った風に政宗がくすりとすれば、幸村が、あ、と恥ずかしげに声を上げて、あの、その、と寝室へ半ば強引とも取れるような行動力を發揮したとは思えない程狼狽えてみたりして、更に政宗の笑みを深くさせたのだった。

あんな風に熱心に自分を煽った癖に、こんな時に似つかわしくない程その純情さを垣間見せたりする幸村に、政宗は緊張に強ばった心と体がほっこりと緩むような気がして、ふわりとべ

ツドに下ろされる頃には、アンタ相変わらずおかしいよなア、と幸村を揶揄えるくらいにはなっていた。

それでも、ぎしりと政宗の体重を受けて沈むベッドが上げた悲鳴を聞けば、やはりこれから起ころうる事を予感させて、ふい、と黙ってしまふ。

そんな政宗の様子を見て、揶揄われて頬染めた幸村も、俄に緊張するような気持ちになつて、先程あんなに政宗に夢中になつてしまつた自分をも思い出し、ぎくしゃくと音がしそうな程ぎこちなく、政宗を下ろしたベッドを見つめながら床にしゃがみ込んだ。

あの、と何をどう言つていいのか、先程までの熱が、勢いが、削ぎってしまった感じが妙に気恥ずかしくて、幸村はどうしたものかと、ベッドに座つた形のままふわりと頬を染め上げて俯き睫毛を揺らす政宗に声をかけた。

けれども、その先が続かずに、ぱく、と開けた口を再び閉じて床に座り込み、俯く政宗を見上げてみれば、薄紅に染まつた目元に影を落とす睫毛がふるりと揺れて、先程まで夢中で吸い上げてふつくらと色付いた唇を何やら難しそうに引き結んでいて、その表情がやたらと愛しくて。幸村は見上げた先にある政宗の唇に、再び引き寄せられるように顔を寄せた。

こんな風に二人きり、心通わせ合つたと言えど甘く蜜の溢れるような時間など過ごした事のない政宗は、きつと、先程その体を蝕んだ熱情を交わし合う事になるのだろうか、と言う予想はできるものの、実際そのような経験はない上に、あの、と覚束ない声を発したきり自分と同じように口を引き結んでしまつた幸村にしても、きつと己と同じくこのような事をした経験もないのだからと思うし、その緊張がありありと伝わってくるようで、政宗もどうしたら良いの

か分からずに、顔を上げる事もできないでいるのだ。

けれども、そんな逡巡は一瞬の事で、不意に顔を寄せてきた幸村に再び唇を塞がれてしまえば、それは馴染むように政宗を蕩けさせた。

先程覚えたばかりの口付けは、苦しくて切なくて、それなのに奇妙に幸せで甘やかな気持ちにさせて、ゆるりと、政宗の涼しげな一つ目を睨が覆い、誘われるように幸村に向かつて体を傾がせてしまう。

とろりと溶け出すような感覚に幸村が酔いしれて、政宗の上半身がひっそりと近寄ってきたのを感じれば、それを押し戻すように幸村は伸び上がり、政宗の肩に手を回し抱き締める。そうすれば、酷く遠慮がちな所作で政宗の手も幸村の服の裾を握ってきて、ちゅ、ちゅ、と啄む音を零す幸村の口元を綻ばせた。

こんな仕草も可愛らしい、と。

擦り寄って小さく凭れ掛かるようにする政宗の愛しさに、引きかけていた熱や情動が再燃してきて、幸村はぐいと政宗を抱き締めると、そのまま政宗の座るベッドに乗り上げ、再びざしりと、政宗を下ろした時よりももう少し大きめの悲鳴をベッドに上げさせた。

ふ、と政宗の口から溜め息にも似た息遣いがして、乗り上げてきた幸村に、驚いたように遠慮がちに掴まれていた服の裾がきゅ、と引つ張られる感じがして、政宗の指に、手に、力が籠ったのが伝わる。

それでも、その魅惑的な吐息を零す慎ましやかな紅色の誘惑には勝てずに、幸村がぺろりとしつとりと潤う政宗の唇を舐め上げれば、そこは簡単に薄く開き、もつと舐めて吸って味わい



たいと渴望する食欲な幸村の舌の侵入を許したのだった。

政宗に受け入れて貰えた喜びに、胸の奥がぎゅつと引き攣れて心臓が一際大きく跳ね上がった幸村は、その喜びのままに口付けを深くして、政宗の口内に忍び込ませた舌をゆるゆると這わせ、並びのよい歯を一つ一つ確かめるように、その数を数えられる程丁寧になぞり、うつとりと目を閉じて夢中になって食らい付く。

時々勢いがつきすぎて、がち、と政宗と幸村の歯が音を鳴らすけれど、それを笑える余裕は二人にはなく、夢中でお互いに唇を擦り合わせる。

ふ、は、と短く息を継ぐ音とちゅ、ちゅ、と言う濡れた音が混じり合い、匂い立つように二人を取り巻く空気が密度を濃くしてゆく。

ぬるりと政宗の舌を舐め上げ、やはり甘いような気がする、などとぼんやりする頭で思いながら幸村は、政宗が許すままに、それに甘えるように、思うままに狭く温かい空間を味わい尽くし、舐めるたびに政宗の肩がふるふると揺れるのを楽しんだ。

そして、政宗の引っ込み思案な舌をくると巻き取れば、きゅ、と政宗の肩が上がり、幸村の服の裾をさらに強く握り締めて、んんん、と鼻に抜ける音を上げる。

それはまるで政宗に強請られているようで、都合のいい解釈だ、と自分に突っ込んでみたりもするものの、その甘やかな味を覚えてしまった幸村が止められるわけもなく、苦しげな、それでも艶やかな政宗の上擦った鼻声を、もつと自分の耳に響かせたくて、じゆるじゆると端ない音がするくらいに、政宗の口内を、舌を、齒列を、全て吸い上げ舐め上げ、こくんこくんと政宗が二人分の唾液を飲み下すその喉奥までも知りたくて、幸村は舌先を伸ばしたのだった。

はふはふと息を乱して夢中で自分に吸い付いてくる幸村の予測のつかない動きに、政宗はいつの間にか押さえ込まれた後頭部を傾がせて見上げる形で幸村を受け入れていて、甘怠いような鼻声か抜けるのを内心忌々しく思いながらも、それでもこの熱の籠る行為が止められなくて受け入れるままに受け入れて、ちゆるちゆると口付けが深くなればなる程溜まっていくどちらのものともつかない唾液を懸命に飲み下し、沸騰しそうな程火照る頬を持って余し、幸村に縋り付くようにしがみつき、ふわふわと意識を漂わせたいけれど、思わぬ場所にまで舌先を振じ込まれ、政宗は思わず、うえ、と小さく声を上げた。

う、う、と息苦しい声を上げた政宗に、驚いた幸村が慌てて顔を離せば、ぴちゅ、と今までくっつき合っていた場所から気恥ずかしい音が鳴り、つう、と粘度の高い糸が引き、ふつりと途切れた。

「Shit! アンタ何しやがるッ…」

幸村の舌に突付かれた喉元を押さえて、政宗はとろりと溶け出していた一つ目をつり上げて見せたが、声はふにやりと崩れ、睨んでいるつもりだろうその目はうるりと濡れて、膨れる頬は染まり上がっていて、はあ、と間抜けな声を出した幸村の、口付けで緩くなっている気持ちを余計に緩くさせるだけで、本当に申し訳ないと思わせるには些か不十分だった。

「アンタ本当に分かってんのかよ」

むう、と吸われて色付いた唇を尖らせた政宗に、幸村は、ほにやと微笑んで、はい、すみません、と全くちぐはぐな表情と言葉を寄越してきて、政宗を呆れさせた。

「政宗殿が余りにも可愛らしいので、夢中になってしまい申しした」

くしゃ、と笑った形の目元と鼻頭に皺を寄せて幸村が声音だけ少ししょんぼりとさせれば、はあ、と諦めたような吐息が政宗から零れて、ん、と頷きなのか催促なのか、そのどちらとも取れるような短い相槌があつて、首を引き伸ばして顔を傾げられる。

その仕草にばあつと心が晴れるようになった幸村は、再び誘われるように政宗の顔に自分の顔を寄せ、政宗殿、と自然に口から零れ落ちたその音に、合わせるように呼ばれた本人の臉が降りる。

するりと未だ赤いままの政宗の頬を撫で上げ、指先に引かかる眼帯の紐を解き、そつと今までの幸村の人生で一番ひっそりとした動きではないか、と思うくらいに慎重に丁寧とその右目を覆う白いものを外していく。

あ、と政宗の緩く開いていた唇が驚きの形に小さく変わり、掠れた声がころりと転げ落ちたけれど、幸村はその声すらも掬うように、白い眼帯を外し、露になった右目に釘付けになった。皮膚の色が変わったその場所は、確かに他の政宗の肌色とは違つて薄赤く傷跡が残っているけれど、話に聞いたように醜くて、と言われるのとは少し違ふ、と思う。

確かに痛々しいように見えるけれど、醜くもないし恐ろしくもない。今だって、怯えるように幸村の腕を掴み小さく零した驚きの声は掠れていて、そんな様子の政宗に心が痛いような安らぐような不思議な気持ちになつてしまう。愛しくて切なくて、余り情緒だとか風情だとかを解せない自分だけれど、今はそんな普段では感じないような複雑な心模様を感じるのだ。この愛しい人についた痛々しそうな傷跡を見れば。

じつと見つめて瞬きすらも忘れていた幸村だったけれど、政宗の閉じた左臉がぴくりと痙攣

するのを視界に入れて、感じた衝動のままに自分の二つの目を瞼に隠した。

ぎし、と体重が移動する音だけを残して政宗の右目に静かに口付けを落とす。やはり好きだ、と。どんなに痛々しく見えても、それすらも愛しい、と。

決して離れないし、離さない。そしてやはり、震える睫毛に縁取られた唯一の目が貴重なものに思える、と。

この傷のおかげでこの人の視界は狭く、他者を多く映さない。

その美しい一つ目にはいつだって自分を映してくれるのだ、と。

彼の持つ狭い視界にいつだって自分が、自分だけが、映り込んでいたい。幸村は酷く我儘で貪欲な気持ちに駆られる。

好きだ、と一つ低く呟いて。

手にした眼帯が握り潰れる程幸村はその声音とは裏腹な、内側から駆け上ってくる情動に突き動かされて、べろりと政宗の開く事のない瞼を舐め上げた。

固く引き結ばれた唇を更にきゅっと噛み締めて、政宗はその衝撃に耐えたつもりだったが、びくりと肩は大袈裟なぐらい跳ねてしまい、内心で舌打ちしたけれど、幸村の労わるような口付けと時折独り言のように零れてくる小さな告白に、ゆっくりと息を吐き出し肩の力を抜いていく。

壊れ物を扱うように丁寧に、負った傷のせいで疎らにしか生えていないその睫毛の一本一本まで舐めるようにする幸村に、本当にコイツおかし、と当初抱いた印象を深める一方で、そんな風に揶揄う事もできない程、緩やかに溶け出すように心が流れ出す。——幸村に向かつて。

安心するような、甘えたいような、コイツなら大丈夫だと信じられると感じた気持ちが益々強まるような。そういった様々な幸村に対しての感情がゆっくりと溶け出し、流れ出て、それはいつしか奔流となり政宗の心を満たし溢れさせ、堰き止めるもののない小さな心は、その容量を遥かに超えてしまい、ぶわっと膨れ上がる。

——ああ、どうしよう。コイツが好きだ……！

溢れ出す感情をどんな風に言い繕おうとも、それは一つ場所へ帰結する。

安心するだとか、信用できるだとか、怖くないだとか。

そう感じる複雑な気持ちの全てが、感情が、結局のところは幸村の事を好きだと、好きだからだと、政宗は理解する。

好きだからこんな風に触れられても怖くないし、これ以上今までのように傷付く事もないし、そしてまた己の事をこうして愛しいと思っている事が全身から伝わるように、大切に扱われて、さらに好きだと、愛しいと、政宗の中に溢れ出してくるのだ。

もうこれ以上アンタの事を好きにさせないでくれ、と願ったいつかのように。

けれども、こうして気持ちのままに口付けを受け入れて、這い上がる得も言われぬ感覚に身を任せれば、怖いようなそれでいて安らぐような不思議な気持ちになって、そしてそこに相変わらず横たわるのは幸村を好きだと、愛しいと思う気持ちなのだ。それは益々膨れ上がるばかりで、政宗はその感情に飲み込まれて行く。

もう自分では、自分の意思では止められない。そんな風に思って震える手にぎゅうと力を籠めれば、それに応じるように幸村の唇が政宗の唇を食むように動き、もう大分吸い上げられて

慣れてきたような気さえする Kiss が、心地よくて、ふ、あ、あ、と鼻に抜けるような吐息が自然と零れる。

氣持ちが昂ぶれば昂ぶる程、じわっと腰に熱が溜まるようで、それが恥ずかしくて、幸村と触れ合う事が嬉しくて幸せで、けれどもやはり自分の反応が憚られて、政宗は苦しくなる息の合間に、やだ、と小さく声を漏らしてしまう。

「あ、お嫌でござったか」

政宗の氣恥ずかしさによる小さな眩きを、政宗の事が氣になるからこそその耳の良さで拾い上げてしまった幸村が、その性質ゆえの生真面目さで額面通りに受け止めてしまい、不安げな顔で政宗から唇を離し眉を寄せる。

急に離れていく心地よい温もりに、政宗は消え入りそうな声で、あ、と零してしまい、その声音は些か残念そうな響きさえ含み、後追いするように幸村のふつくらと濡れた唇を追いかけてきて、赤い頬を更に朱色に染め上げ、ふにゆ、と政宗の方から押し付けられた形になった口付けに、下がった眉をひよここと跳ね上げさせて驚きに目を見張った幸村は、途端ふにやりと笑み崩れて、言葉と違う行動を起こした可愛らしい政宗の唇をつるりと舐め上げた。

自分が起こした裏腹な行動に、もう何でこんな事を、と内心で悔しがった政宗だったが、それでも幸村が宥めるように優しく舐め上げてくるその仕草が愛しくて、触れ合っている事が心地よくて、それは強請るような真似をして恥ずかしいと思う氣持ちを上回り、再びとろんと思考が溶け出してゆく。